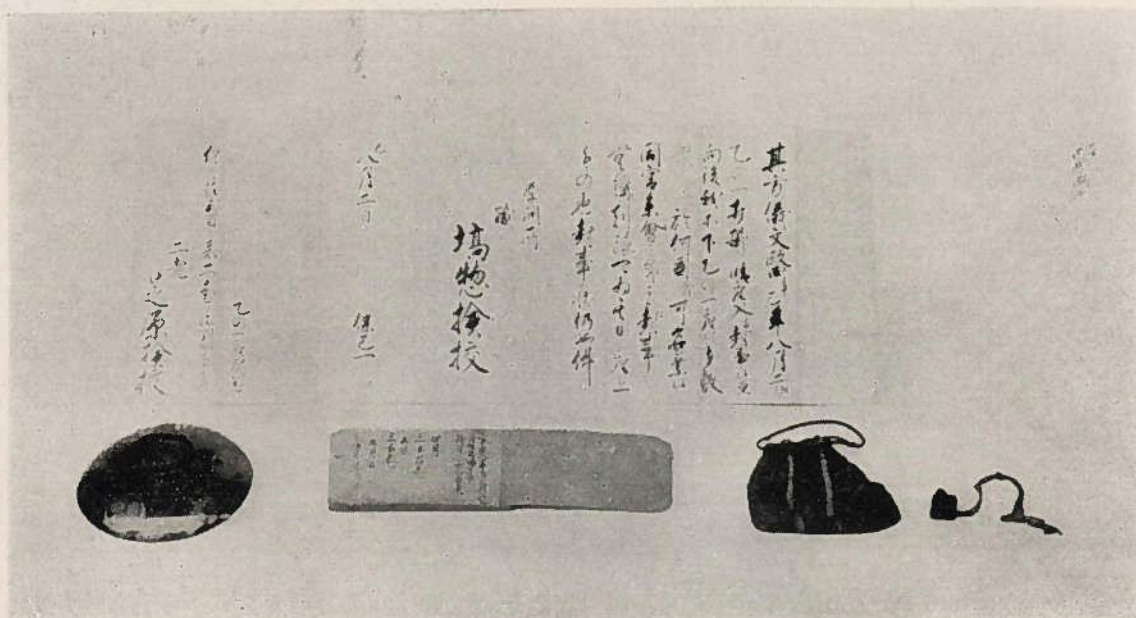


塙檢校送物集



(像肖生先一已保塙位四正贈)





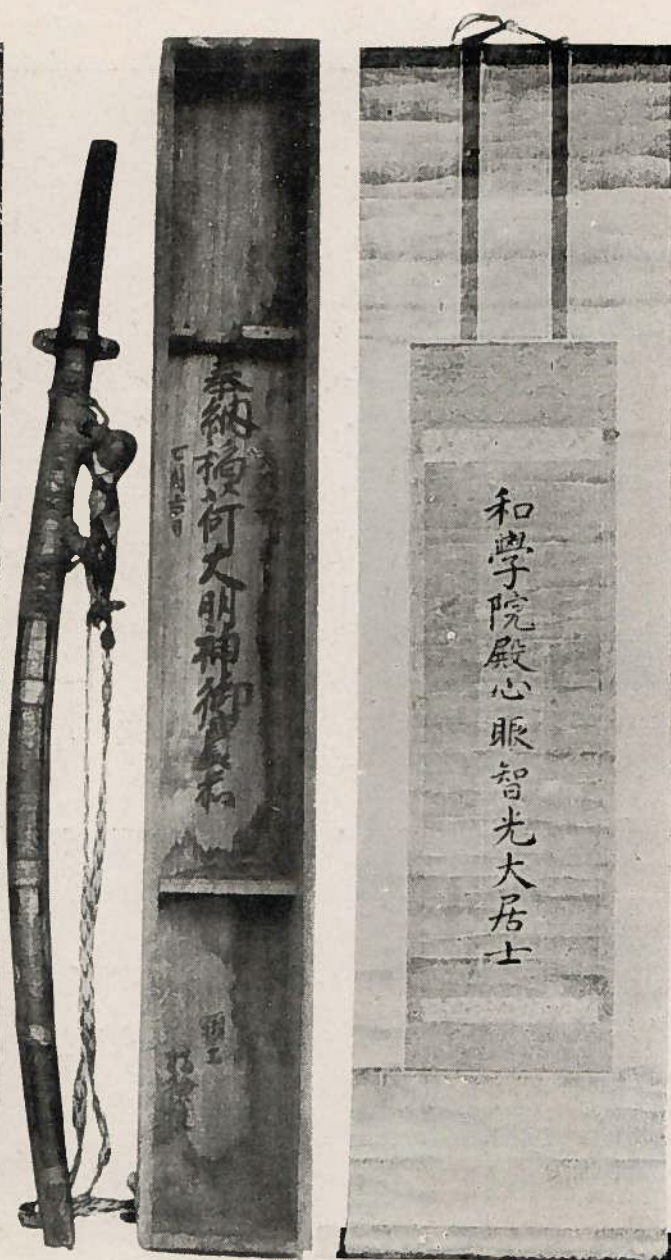
(一其) 集物遺按撿塙



家 生 按 檢 塙



墓墳按撿塙.



(二其) 集物遺按撿塙

序

明治三十八年十月埼玉縣知事を拜して任に就くに當り、戦後經營の施設急を要する際として人物の養成が最も必要なるを感じた、而して其養成には先づ德育を盛に爲すにあるが、縣の生み出したる偉人傑士の行績を明にするの適切なるを思ひ、其取調を爲さしめた、それが廳て埸先生の高徳を以て第一とし、先生の傳記を載せて縣教育會より刊行した德育資料である、其際に先生の生家を訪ね親しく先生の遺物に接し、追慕の情に堪えずして誠に感慨の深きものありしは、今に忘るゝを得ぬ所である、思ふに大偉人の遺物は世人を感奮興起せしむるもの多大にして、單に一家の至寶たる斗りてなく、廣く國の寶とも云ふべきで、宜しく鄭重なる保存の方法を講じ、尙その由緒をも明に爲し置くべきである。

朝廷よりは其後、先生の高德を追賞して御贈位のことがあり。世人の先生を追慕すること一層廣く且つ深きに及び、今日では海外よりも心ある人々は遙に慕ひ來るに至つたは、誠に故あることゝ云ふべきである、近頃先生の生家の地を訪ぬるもの遠近より愈々多く、

常に絶えざるに至つた、此際に於て親しく先生の遺物に就き、拜觀者の榮と爲るべき冊子が編まれ、此處に成るを告ぐるに至つたは、一には先生の遺徳を顯彰する便とも爲り、一には其遺物の散逸を防ぐ所以とも爲り、誠に結構なことである、嚮に埼玉縣に在職當時の事を想起して欣快に堪えず、需めらるゝ儘に一言所思を述べて卷頭に添ふこととする。

昭和十二年十二月

侯爵 大久保利武

序

埤先生が古今に絶する偉人にして、其功績は内外等しく鑽仰して止まざる所である。先生は學問の道尙ほ進まざる時代に於て、萬人の企及し難き大業も不自由な盲目の身を以て果された、而かも夫れが専ら舊慣を尊重して駿才逸足も空しく不遇を歎ずる封建の時代たるを思へば、愈々難事業たりしかゝ窺はれる。先生の人格識見にして始めて爲されしとは云へ、堪へ難き幾多の辛酸と苦心とに由る結晶にして、先生一代の行實は誠に後人の鑑戒として惰夫をも立たしむべきである。

先生が兒玉郡の一角に出でられしは郷土の誇たるも、敢て一郡一縣の私すべきでなく實に我國の誇たると共に其遺蹟遺物は力めて保存を計り、永く遺徳顯揚の途を講ずべきである。先年本縣は先生の生家たる荻野家を史蹟として指定し、昭和十年には地方有志者に依り兒玉溫故會が設立せられ、何れも其趣旨に由ると察せられる。

今や郷土史の研究家たる金鑽武城翁は、荻野家に傳はる先生の遺品に就き詳密なる記載を得て本書の成るを告げた。先生の遺徳を偲んで其家を訪ぬる人々が、本書に依つて一

層感激に充つるを思はゞ、武城翁の功また大なりと云ふべきである。本書の如きは既に存すべくして未だ缺く所とて、此處に成るに至りしは深く欣快を覺ゆる儘敢て蕪言を述べて序とす。

昭和十二年十二月

内務省囑託 柴田 常 惠

序

埧保己一先生は我郷土出生の第一の偉人であり、學者である。殊に盲目の身を以て和學講談所を創設し、群書類從の大著述をなし當時の學界に貢獻なせしのみならず後世の學者に裨益を與へた功績は絶大なものである。先生こそ心眼宇内に徹する世界的大學者として讃仰なすべきである。我兒玉溫故會は昭和十年に創立せられ先生の功德を紹述し、其遺蹟顯彰を圖らむため地方有志者を以て組織せられ、慰靈祭其他種々の事業を行ひつゝ有るのであるが、近來先生の遺徳を慕ひて其生家を訪ね遺物を拜觀し、展墓なす者が激増なしつゝある、欣幸に堪へぬことである。

今回地方郷土史研究家である金鑽武城翁が、先生の生家なる荻野家に遺存なす。文献遺物等を克明に研究せられて埧檢校遺物集を編纂せらるゝに至つたことは、先生の高德を廣く世に紹介なすに當つて好個の資料となり、衷心より欣びにたへない、本著述が多くの人々に頒與せられ、益々先生の高德功業が萬人の崇敬の標的となり、地方風教の源泉とならむ事を希望してやまぬ次第である。

昭和十二年十二月

兒玉溫故會長 高 橋 守 平



塙檢校遺物集

金鑽武城編纂

塙檢校略傳

先生は延享三年武州兒玉郡保木野村に生れ、初め寅之助と稱したり、父は同村百姓萩野宇兵衛、母は賀美郡藤木戸村齋藤理左衛門の女なり、五歳の時肝の病の爲に盲目となりしが、十三歳の時に父に請うて江戸に出て雨宮檢校須賀ノ一の門人となり、傍ら萩原宗因の門に入つて歌書物語を川島源八郎貴林に漢學并に神道の教へをうけ、品川東禪寺の僧孝首座により醫書を學ぶ、十八歳にして衆分に進み保木野一と改名す、二十四歳の時加茂真淵の門に入り六國史を學ぶ、三十歳にして勾當に進み保巳一と改名し、番町麩谷に移り住む、安永八年三十四歳のをり叢書を編集して、其開板成就を平河天満宮に祈誓し、毎朝四つ時に起きて般若心經百卷づゝ讀誦なすことを立願したり、三十七歳の時妻を娶り、天明三年檢校の官に進み、日野資枝卿の門に入り和歌を學び、其翌年水戸藩主文公にまみえ源平盛衰記校正の勞により月俸十人扶持を賜ふ、寛政五年(四十八歳)裏六番町に和學講談所并に文庫の設立を出願して公許を得て經營し、後其功により白銀十枚を下賜せらる、同十年品川御殿山下土取場を借りうけ板木藏を設立し、日本後紀、令義解等を開板す、享和三年(五十八歳)一座總錄職となり、文化二年(六十歳)表六番町へ和學講談所を移轉し、一座十老となる、文化五年(六十三歳)幕府より年々手

當として五十兩の下賜あるに就き御用出仕三人手傳四人を任命す、同十年四月二十八日(七十歳)多年の功勞により將軍に御目見仰付られ御目見醫師の身分仰渡さる、文政元年(七十三歳)二老に進み百練抄・宇多天皇事記・醍醐天皇事記・扶桑略記等開板し刻成る、同四年(七十六歳)二月總檢校續目の儀所司代松平和泉守より仰渡され、同年五月御目見御禮言上に罷出で同月御暇下され金二枚時服二を拜領す、八月二十三日病氣につき總檢校を辭職出願し聽許なり九月十二日病歿す、死後一年白銀二十枚御下賜あり、明治四十四年六月特旨を以て正四位の贈位ありたり。

塙檢校の生家萩野家に傳來の遺物

一 先生の法號 一軸

塙保已一先生の法號を軸物としたる者なり、筆者は先生の門人にして書道に名高き屋代弘賢なり(長二尺七寸七分幅七寸三分)、表に和學院殿心眼智光大居士、裏に文政四^{辛巳}年九月十二日臨終^{末下刻}とあり、古き表装にして時々供養の日に使用するものにて家の重寶として保存しあり。

二 先生所持の巾着 一

此の巾着は先生の生母の縫ひたる者にして先生が江戸に出發の際僅かの路用を入れ腰につけ持参したるものなり、寸法は縦二寸九分横六寸六分、是れは雲齋織といふ布にて作りたる極めて質素のものなり。

三 般若心經御卷數帳 一冊

先生の群書類從編纂成就のため麴町平河町の天満宮に祈願し、般若心經百萬卷を讀誦せんことを誓ひたり、安永八年亥正月朔日より天明元年丑三月晦日まで拾萬六千三百卷讀誦せし事を記入しなり、先生は安永八年亥正月朔日より文政四年八月廿二日まで四十二ヶ年と八月廿二日の間其長き年月少しも懈怠なく毎朝寅の刻(午前四時)に起床し、心經百卷以上づゝを讀誦したる備忘録なり、此讀誦せし卷數總計二百一萬八千六百八十卷なり、此卷數帳は表紙に覺書の二字あり墨附二十四枚なり、これは千代紙の表紙にて二寸二分に四寸二分の横綴自製の帳面あり、この帳に記載するには先生が別に備へし紐を以て心經讀誦の數を結び置き、それを夫人が時々見て數へ記録したるものなりといふ。

四 先生遺愛の短冊 一葉

言の葉も及ばぬ身には目にみぬもなか／＼よしや雪のふしの嶺

この歌は先生が京都に上りしをり駿河の國浮島が原にて詠めるものにて、先生の歌集なる松山集に出づ、實に絶調の秀詠なり、それを門人の屋代弘賢翁の書きたる者、この歌は保木野の荻野家の墓地にも書きて樹てあり。

五 遺愛の盃 一箇

この杯は天明五年水戸藩主文公烈公の祖父治保卿にまみえて盛衰記日本史校正なしたる時拜領し

たる者なるべし、先生は壯年の頃は酒を嗜まざりしが晩年に至り少量の酒を飲みしといふ、故にこの盃は其頃使用せられし者ならむ、盃は木製にして道恵形、寸法は徑三寸九分、塗は内朱塗にて裏には三葵の紋章四つあり。

六 遺愛の色紙 六葉

色紙は金字模様散しなり、筆者は五辻右兵衛佐英仲、竹内彈正大弼惟庸、持明院少將基輔、綾小路中納言俊資、外山宰相光實、土御門修理大夫泰榮の六名なり。

七 遺愛の銅印 一箇

青銅の鑄物にて六分角なり、一滴散千憂と刻したる銅印にして氣韻に富み古色掬すべし、是も御盃と同じく水戸藩主文公より拜領せしものなりといふ。

八 墓誌銘の拓本 一枚

先生の遺骸を納めたる靈棺に刻せる文字なり、文政四年九月十二日先生卒去の時四ッ谷安樂寺に葬りしが、其地附近が一帶に荒廢し不潔となりたるを以て 明治三十年井上頼圀博士首唱者となり佐伯有義氏奔走により近接せる愛染院の墓地に改葬したる時拓本となしたる者なり 其文に曰く「故和學講談所前總檢校塙保己一墓、文政四年九月十二日歿、享年七十六歲葬於四ッ谷安樂寺後山」と記せり、縦一尺四寸横一尺八寸あり裏打して保存す。

九 座頭告文 三通

花輪檢校權威の告文、塙惣檢校惣晴の告文、綾一座頭入の告文(別記す)。

十 座頭引繼封事狀 四通

乙の一座頭引繼狀、綾の一座頭引繼狀、春宵の一座頭引繼狀、保佐一座頭引繼狀(別記す)。

十一 御召狀 二通

文化十二年多年書物編纂事業に功蹟ありしに因り御城に召され 時の狀

明七つ時御城江可罷出御候以上

四月六日

塙 檢 校

堀 攝 津

明廿八日御目見え御序有之候間五つ時御城江可罷出候以上

四月廿七日

植 駿 河

十二 正装の裂地 二

塙 檢 校

先生總檢校になりし時使用せし正装の下着の裂地なり、色は白綸子の綾織にして一は二寸八分と二寸、一は二寸と一寸五分の小切なり。

十三 大御所御召

先生が將軍家より拜領せし品なりといふ、色は紫精好にして一寸五分と五分の小切なり。

十四 清涼殿の疊の縁地 一

先生が京都に上りし時禁中より賜はりし品なりといふ、寸法は一寸と五分色は赤色なり。

十五 扇子 二本

一本は一尺二寸骨は七本大國天畫像なり、一本は長一尺骨七本のみにて紙なし。

これは伊勢神宮御遷宮の砌龍桂に着けたる者にて先生參宮の時拜領せしものなりといふ、

十六 和學講談所發起人名簿 一卷

頭 取

三百俵

井上藤左衛

千石

伊丹桃之亟

現米八十石

渥美橘藏

出役頭取

同

佐藤半兵衛

二百五十俵

小貫彌太郎

出役手傳

父高

二百五十俵

藤島祿之助

五百石

寛善太郎

現米八十石

石橋又右衛門

七百五十石三升餘

辻彦三郎

同

太田信太郎

十人扶持

關谷健次郎

手傳出役名

五百石

高井隼人

千四百石
手傳

松前修理

千四百石

服部靱負

五十俵十人扶持

松尾永藏

七百三十五石

園領正太郎

會頭

吉田信之助

二百俵

鈴木次郎四郎

同介

木村莊之助

父高
千七百二十石

落合彌太郎

小中村將曹

百俵

高橋八十郎

横山保三

三百石

柳原民部

黒川主水

三百石

伊丹喜八郎

敷田大次郎

十七 先生着用の合羽 一枚

先生が平河町の天満宮に千日参りなせし時使用せしものなりといふ、布地は鐵色木綿にして丈は二尺八寸五分、紬は七寸五分にて粗末の品なり、此品は先生の門人中山信名の著はしたる「塙檢校傳」と共に昭和五年に祕藏しありし箱の中より發見せるものなり。

附記

(い)追悼歌集并に當座歌集等あり別記す。

(ろ) 先生の男塙次郎忠實の法號一軸

(は) 先生の女登勢子の着用せし振袖小片 一

寸法は縦一尺八寸幅七寸布地は鞆形縹子に菖蒲と梅に牡丹の花を散らし色は青と草色にて刺縫したるもの・裏は紅絹なり。

(に) 群書類從寄附に對する伊勢神宮の豊宮崎文庫よりの受書

群書類從

右故塙先生所編明分類隱合至一千二百七十種六百六十五冊・皇朝自古蒐羅藉未有若此之盛・矧辨晰異同一從正本可謂精且備也、今茲戮力獻納大神宮文庫終先府君之志實是弘道崇學覃及斯舉、神豈不韻純暇是保書生與受厥錫不勝欣載之至遵例標錄以照千祀謹狀

文政十二巳丑年六月

豊宮崎文庫書生

宮崎
文庫

塙次郎殿

(ほ) 令義解寄進に對する朝廷學習院よりの受書

令義解 一部

右被納學習院正照收仍如件

嘉永元年八月

學習院雜掌

(へ)先生の男塙次郎の書籍并に折手本

この折手本には女五常訓をかきあり、

(と)先生の生家郷士に取立られし時の申渡書

申渡之覺

其方家之儀者古來々郷士に而有之候處中興流落に及候共惣檢校保已一者其家に而出生追々昇進子孫御旗本に被成候に付公邊向御差出之家譜に者古來之格を以郷士之趣書上被置候、就而者其方家之儀苗字帶刀之家格與可心得候此段申渡者也

元治元子年十二月

地頭所内 松田 宜○

右保木野村 彌七 江

前書之通相違無之候以上

永直之亟○(領主永島直之亟)

(ち)借用證書 一通

此は先生の男次郎忠寶氏が文久年間に群書類從藏板置場建設の時、其費用として萩野家より金子を借用したる時の證書なりといふ。

請取金子之事

一金五十兩也

右者主人藏板置場取建候に付爲右手當御頼被申候處御送り被下書面之通慥に請取申候期月返濟等取極之上本證文差入被申候様可致爲後日請取證文仍如件

文久二戌年十二月

塙次郎内五味三次○

前書之通相違無之候以上

次郎 ○

この當時の萩野家は財産乏しく漸く生活なす状態なりし爲に、この金調達に就きては自己の所有地を質物にして他より金子を借用し江戸に送金したる者なれば、この證書は大切にし置くべしと、當時の彌七氏が家人によく／＼語り傳へおけりといふ。

外に

一飾御太刀 一振

此は先生が天明三年に生家の鎮守稻荷明神に寄進せられしものなり、太刀の長三尺五寸なり裝飾は柄は絹糸巻鍔は南蠻鐵にして鞘は青貝塗、鐙は赤銅、帶紐は紫色の絹糸にて二筋長四尺三寸あり

太刀は桐箱に納めあり

表に 御太刀

天明三卯年七月吉日

中に 奉納稻荷大明神御寶前

江戸土手四番町 願主 塙檢校

此太刀は現に村社稻荷神社の寶物として傳はり神職鈴木徹三氏の家に保管しあり。

按ふに是天明三年三月に先生が檢校に進みし年なれば奉賽の意ならむ。

一眞鍮燭臺 一對

此は先生の生家の菩提寺なる兒玉町禪宗の古刹實相寺に寛政十二年に先生が父母菩提の爲に寄附せられしものなり、其燭臺に彫刻せる文に

一基には春光喜山居士（これは父宇兵衛の法名）、一基には清室妙蓮大姉（これは母きよの法名）と刻み、寛政十二年庚申十一月施主塙校檢實相寺の文字を二基に彫刻しおけり、最もよき記念の遺品なりこの燭臺の高は二尺八寸あり。

一漆塗湯桶 一對

これは先生が稻荷神社の修驗福泉院に寄附せしものといふ、製作は桐のくり抜きにて表は漆塗内は朱塗にて柄あり、高四寸五分幅五寸柄長一尺一寸なり、これも福泉院今の鈴木徹三氏の家に保管しあり。

○
告文三通の寫

一 中浦檢校同宿

花輪檢校權威之告文

天明三癸卯年三月廿四日申刻花輪掛司々立寄召物大座々々權々正を引晴任惣別當告文與封事置今朝召物之規式於列席、任檢校告文與封事候條向後中浦檢校同宿花輪檢校與於何國も可被名乗候間、同宿參會之節者任別當之日限刻限次第可有列席者也、學問所中浦殿在江戸我等預故告文仍而如件

卯四月五日

岸部檢校

城郡判

花輪檢校坊

裏に 表書之通封事日出度候以上

卯四月五日 職吉村惣檢校判

二 寛政十二庚申年十二月廿日塙殿惣晴告文々與事候條向後塙惣晴之檢校與於何國茂可被名乗者也

申十二月廿日

服部檢校葎一判

塙檢校坊

裏に 表書之通封事日出度候以上

職・豊永惣檢校判

三 二老塙檢校 綾一座頭座入告文 樗雲事

其方儀文政三^{庚申}年五月十日卯二刻御二老塙殿綾一粒入告文與封事候條向後二老塙檢校下綾一、座頭方敷衆分與於何國も可名乗候、同窓參會之節者封事之日限刻限次第可令列座者也學問所御二老塙殿在江戸我等預り故依告文如件

辰五月十日

岸並檢校

城民判

樗雲事綾一座頭へ遣

裏に 表書之通封事日出度候以上

辰五月十日

職嶋波惣檢校判

○

封事四通の寫

一 職塙總檢校下乙的一座頭引繼封事狀

其方儀文政四^{辛巳}年八月二日、乙の一打掛を暗座に入與封事候條向後我等下乙的一座頭方敷衆分與於何國茂可名乗候同宿參會之節者封事之無構刻限可爲其日之座上者也封事狀仍如件

已八月二日

學問所藏 塙惣檢校

保 已 一

乙の一座頭江遣

猶々任式目之表二老添判有之候

二老 芝原檢校

二 職塙檢校下綾一座頭引繼封事狀

其方儀文政四^{辛巳}年八月八日あや一はぎの上衆引を申與封事候條向後我等下綾一座頭壹度之上衆引與於何國茂可名乗候、同官參會之節者封事之刻限に無構可爲今日封事之座上者也封事狀仍而如件

學問所職 塙 檢校

已八月八日

保 已 一 判

綾一座頭江遣

猶々任式目之表二老添判有之候

二老 芝原檢校判

三 職塙惣檢校下春宵の一座頭引繼封事狀 春宵一事

其方儀文政^{辛巳}年八月十八日春宵一座に直り與萩之上衆引を申即春宵の一に替る與封事候向後我等下

春宵の一座頭壹度之上衆引與於何國茂可名乘候同官參會之節者封事之刻限に無構今日封事之可爲座上者也封事狀仍而如件

已八月十八日

學問所職 塙惣檢校

保 已 一 判

春宵の一座頭江遣

猶々任式目之表二老添判有之候

二老 芝原檢校判

四 職塙檢校下保佐一座頭引繼封事狀 守の一事其方儀文政四辛巳年八月十九日守の一萩之上衆引與申而保佐一に替る與封事候條、向後我等下保佐一座頭壹度之上衆引與於何國茂可名乘候同官參會之節者封事之刻限に無構今日可爲封事之座上者也封事狀仍而如件

學問所職 塙檢校

已八月十九日

保 已 一 判

守の一事 保佐一座頭江遣

猶々任式目之表二老添判有之候

二老 芝原檢校判

一先生遺愛の六葉の色紙にかゝれたる歌と其讀人并に筆者の名は左の如し
遺愛の色紙(三夕暮)

寂蓮法師 綾小路中納言俊資卿筆

寂しさはその色としもなかりけり眞木たつ山の秋の夕暮

西行法師 外山宰相光實卿筆

心なき身にもあはれは知られけり鴨たつ澤の秋の夕暮

藤原定家朝臣 土御門修理大夫泰榮卿筆

見渡せは花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

以上三夕暮の和歌筆者の目錄あり

前中納言定家 五辻左兵衛佐英中卿書

天の原思へはかはる色もなし秋こそ月の光りなりけれ

皇太后大夫俊成 竹内彈正大弼惟庸朝臣書

雪ふれは峯の眞榲うつもれて月にみかける天の香久山

前大僧正慈圓 持明院少將基輔卿書

雲まよふ夕に秋をこめなから風もほに出ぬ萩のうへかな

塙家に傳來せる歌のかすく

うきしまか原にて

保 己 一(塙)

言の葉のをよはぬ身には目にみぬもなかくよしや雪のふしのね

忠 寶(塙)

あたし野の尾花のもとをふく風に消て歸らぬあきの白露

忠 韶(塙)

墨田川堀江やいつこうち霞む淺草寺の鐘のきこえて

同 人

塙檢校に御贈位賜はりし時

今日賜ふ學ひの道のくらゐ山やまより高き恵みなりけり

同 人

八十になりたる年の始めに

武士の八十字治川に下りたちてまつあらそは齡なりけり

忠 雄(塙)

同

見よや人汀に住る蟹すらも身にふさはさる巢は造らぬを

塙ぬしの家の兼題

春日侍天滿宮影前同詠 社頭梅歌

小杉 楳 邨

常よりもなほ引はへよみしめ縄こゆらむ梅の香さへ惜しきに

同

從五位 源朝臣親貴

廣前のぬさふく風もかをるかな北野の梅の花ささしより

同

源 千 照

春雨のふりし宮居にかけてけり今朝新らしき梅の白木綿

春日詠逐年梅盛倭歌

從五位下 藤 原 廣 風

植えて見る主にならひて春ことにいや盛りなる梅の花かも

春詠梅花薫曉和歌

藤 原 秀

寐覺する人にとはいや如何斗り梅の香匂ふまどの阿閑都伎

詠社頭梅倭歌

幼 翁

さきにけり北野の宮の梅の花なつかしき香をしめのうち人

社 頭 梅

久 子(鶴)

よそめにもうらやましきは梅の花なつかし香をしめのうち人

同

み っ 子

神かきの若木の梅の一枝ををりてかさゝむいく千代の春

同

久

子

さき匂ふ忌垣の梅にかくはしき家の風さへふきそはるらむ

水邊霞

眞

頼(黒川)

鳴の音は聞えすなりし大澤の池にしうかへる夕霞かな

同

正

庸

庭鳥の聲するかたを見渡せは川輪の里は霞こめたり

同

久

子

小筑波も緑になりて墨田川行く水かすむ朝ほらけかな

靜見花

安

彦

己れひとり見る我宿の櫻を匂ふこゝろものとけかるらむ

同

幹

文(久米)

朝めよく起きいてゝ見れは庭櫻つゆの心もうこかさりけれ

同

教

忠

世のことを皆うち忘れうらくと長閑き空にはなを見る哉

同

つれ／＼とかゝくる袖にかをる哉小簾の外山の花の白雪

同

おのつから二ひら三ひら散る花に春のこゝろの見ゆる樂しさ

同

さき匂ふ軒はの花の夕しめりみるこゝろさくみたれさりけり

庭新樹

庭の面の葉廣くまかし名にも似す水枝たわゝに露そこほるゝ

同

青梧の若葉つゆはく打磨き庭たちならすきのふけふかな

同

茂りあふ庭の木末のかけ見えて緑ふかむる池のおもかな

同

ほとゝきすなき初しより我宿の庭の若葉はおひまさりけり

同

二〇

義

一

尙

樹

勤

重

嶺(鈴木)

楳

邨

尙

樹

光

表

弘

恭(鈴木)

窓のうちを暗らくなれと若楓まつにさわらぬほとに茂れり

山吹

楳

邨

露のまも宿寒からぬ色みえてこかぬ玉ちる庭の山ふき

同

武

郷(飯田)

結ふ手のしつくもかはる山の井に影もにこらぬ山吹の花

同

弘

恭

軒ちかく植し山吹あけまきにをり残されて花さきにけり

同

幹

文

物いはぬ花のま垣の山吹は世にあらそはぬ色にそありける

同

千

照(橋)

ちからなき宇田の蛙の聲にさへしなふか畔の山ふきの花

同

安

彦

一えたと思ふ山吹袖ふれてをらぬ花をもちらしつる哉

卯花

政

教

はへあれや月の光りに夕露をかさねてさける庭の卯の花

新樹月

處女子か今朝つみとりし新桑のひまもる月の影のすゝしさ

朝郭公

あき出てまづ口そゝく朝庭になきすてゝ行く山ほとゝきす

同

わか宿のはな立花やなつかしき朝戸あけてもなくほとゝきす

同

朝かゝみむかふ外山のほとゝきすいま一聲をうつしてもなけ

同

綾瀬川つゝみのおゝちつゆしきて朝風きよくなくほとゝきす

同

朝しめりなこりかはかぬむかつ男のみつ枝かくれになく郭公

同

わか宿のはな立花やなつかしき朝戸あけけもなくほとゝきす

水邊郭公

三二

盛 英

親 貴

光 表

し け 子

正 庸

弘 恭

讀 人 不 知

清 矩(小中村)

ほとゝきすあとなき聲は水の上に浮へる舟のあたりにやなく

秋

思

敬

鈴虫のなく音ほのかに聞ゆるをふり捨てかたく別くる野へ哉

同

高

備

さえて今人はなみたの袖にのみ忍ふわかれの秋の夕つゆ

同

宗

敬

秋ふかくなり行くまゝに深草のさとの虫の音尋ねわつらふ

同

幼

吉

ね覺して霜よ霞よ小夜むしろ老はなか夜をあかしかねつも

冬

思

敬

あつ衾かさねきてたに老のみは夜寒の風にあかしかねつゝ

晴後遠水

眞

頼

をちかたの野川の水の細なかれひろらになりて雨はれにけり

同

武

郷

山こしの風の行くへをほの見せて夕影はるゝをちの川水

同

水や空くもか浪かのうたかひも晴行く雨のあとの川みつ

同

八幡山あめのなこりを見渡せは夕日をする淀の川船

山家夕

山さとのたそかれ時はあなあはれ風の音にも水の音にも

同

夕けたく烟りも雲にあらそひて軒よりくるゝみ山への里

同

夕からす軒はになきて静けさもけうときはかり深き山里

同

こけむしろ夕さひしといふぬれとこの山本にしく宿はなし

蟹

横はしる蟹の住所をこととへはあしへといへる所なりけり

同

二四

千

照

正

庸

眞

頼

武

郷

千

照

正

庸

楳

邨

清

矩

里の子かつゝれの袖につゝめともこぼれて返る澤の葦かに

同

有

敏

おもひいる道一筋は葦蟹もよこゆきなから違へさるらむ

同

由

典

うなひ子の橋くひつたひさくり來と知りてや蟹の横はしるらむ

懷舊

忠

瑤

たらちねのいまさぬ事の悲しくて今日あたとふはうれたかりけり

同

信

名(中山)

秩父山あふきし月は木隠れて西の國にやすみ渡るらむ

兒玉町島田汀一ぬしの家に在りし歌

保

己

一

雲とみし櫻ののちにさき出てゝゆきはつかしき山藤の花

二十六歳より寡にて三人の子供をやしなひける

其妹の名をせきとよひけれ婆

新居守村

あふ坂をこえむの人もありけむを心にせき^ををすゑし手弱女

道 悼 歌

一周年忌兼題 露

ほしもあへすいとゝ露けし秋の夜の月に昔をこふる袂は
 去年すきし人の別れは長月の今日にめくれる思ひ出そうき
 虫の音も草葉の下にうらかれて偲ふる袖の露をこそとへ
 秋の野の露ときえてもかきつみし千草の袖に残るおも影
 古事の道にまれなる功績はきえてもきえぬあきのしら露
 あたし野の露ときえにしあととへは尾花の袖に秋風そふく
 野分たつ風のへたての除かれて小萩の露もさそな亂れむ
 袖ぬらす露もしくれも身に入りて思ふや過し一とせの秋
 とにかくに袖そ露けきもみち葉の移ひいにし時のきぬれは
 ふりさめや散にし花の跡とめて小萩にかゝる露の恵みは
 消し世の忘れ形見となりにけり秋來ることに袖のしら露
 夢のことすきにし秋の世のうさを又思ひ出る袖そ露けき

土井大炊頭 利 位
 京極周防守 高 備
 植村駿河守 家 長

信 行 行
 久 行
 紀 成
 美 清
 阿 山
 正 方
 孝 忠
 好 間
 重 威

つく／＼と過にし秋の忍ふれは眞袖の露やにはの萩はら
うらかるゝ野草を見ても古へを忍ふなみたや露のしら玉

登勢子 袋順政匡流納信是爲白盛忠安
子子 翁清立聘一榮順雲直敏業成章

秋ことに淺ちの露は結へともきえにし人の又もかへらぬ
 いつまでか消残るへき我もはや老その森のあきのゆふ露
 光りありと見し間に消てあたし野の秋を怨みの露の眞葛葉
 露よりもはかなきものはあたし野に消て返らぬ人をこそ思へ
 めくり來し形身の秋の夕暮と思べは袖につゆそおきそふ
 見しかけは八月長月移り來て袖しほりそふあきのゆふ露
 けむりさへ立もとまらて去年の秋の露と消にし人そ悲しき
 文このむ名のみ止めて露の身はきえにし秋の名残をそ思ふ
 世にひろく文好む名をとめ置て消にし去年の秋そなつかし
 ふることを思ふに早く一年の今日めくり來し秋を露けき

・三年忌 兼題 秋

暮て行く秋は更なりそれもまたちりて歸らひ長きよの夢 大久保加賀守 忠 眞
 草むらに聲ふりたつる鈴虫もなからへしや哀れいつまで 植村駿河守 家 長
 あきらけき露の光りを形身にも残りおきたる書のまきく 美 清
 思ふよりうちみる影に曇りぬる月やむかしの秋の形身と 世 献

すみ子

光子

彌子

愼子

ゑい子

いと女

みち子

婦人

婦人

婦人

忠 眞

家 長

美 清

世 献

かきつめし其まきくの言の葉は千年の秋を散り失めやは
 くもりなき露のしら玉秋風のちるや夢野のゆめか現在か
 なき人の影さへ見ゆる心ちして月にも秋を濡す夜半かな
 なれくし袖も末野にかれ残る言の葉草を手向とも見よ
 をとくしの月の光りをはしめにて涙にくもる秋の夜の空
 長きよに文をみつゝも紅葉のすきしむかしの秋をしそ思ふ
 ありし世を忍ふ軒はの露の間にきえにし秋の回り來にけり
 残しおく言葉の露も秋をへて玉の光りやなほまざるらむ
 草の葉におくへきものと思ひしに常なき秋の袖を露めき
 くれなゐに染し紅葉も散りはてゝ哀れをそふる秋の夕暮
 みちくの文を集めて秋のよの月にしのふもよゝの古事
 ふりし世を忍ふの軒端秋ふけてしらぬ友さへしたふ淋しさ
 ことなくは染めさらましを紅葉の干しほとなれば風もふきあてぬ
 三日月の心ほそくにしたふかな秩父の山のあきのゆふくれ
 さためなき世のことはりを知せてや風に碎けし秋の芭蕉葉

良	忠	仲	壽	次	盛	良	延	定	圭	周	正	紀	政	順
讓	良	舒	阿彌	春	恭	眸	語	統		義	敏	成	立	清

昔おもふさ夜の寐覺の袖の上にそゝろに宿る月の影かな
 さそはすは散さらましを惜みてもあはれはかなき風の紅葉
 散し世をしたふ言葉の手向にも千代こそ祈る宿のしら菊
 長月の世に惜むへき秋萩のちりしあととふ今日のはかなさ
 人ことに花ともめてし紅葉をちらせし風のうらめしき哉
 今よりや道にまとはむたのみ來し月もいりぬる西の山の端
 昔今この末もまたかへる人なき世とおもへは袖そつゆけき

○

すき行きし昔を慕ふ秋のよの月もなみたに曇るとや見む
 秋風に千世もと見てし武藏野の千草の花はちりはてにけり
 うらかれは歸らぬ秋の蔦の葉も常なき色と風やふくらむ
 歌に文に一かたならて別れにし秋ときいても袖そぬれける
 長月のつきぬ別れを忍ぶまにめくる三年の露のふること
 花ちりし秋したふまにはかなくも三年にかゝる武藏野の露
 雁の聲虫のなく音も諸ともにむかしの人を戀るとそきく

土井大炊頭

正	長	惟	貞	埋	正	内
方	熙	新	利	齋	邦	室
光	妙	麗	法	妙	妙	光
滿	樹	薰	雲	樹	樹	子
貞	操	院	院	院	院	子
操	尼	院	院	院	院	子
院	尼	院	院	院	院	子
院	尼	院	院	院	院	子

言の葉の昔のあとも見しや夢きしや現在すくる秋の夜
袖しほりしのふ袂の露ふりてはかなくめくるこし方の秋
教へおきし言の葉草を形見にて袖のみぬるゝ秋のむら雨
したはれて昔も今のこゝ地すれなみたにくもる秋のよの月
この秋は月にそ忍ふよむ文の道あきらけき世にのこる世を
今よりも幾世の秋にしにのふらむあまた止めし水莖のあと

よね子
桂女
嘉代子
あい子
方子
静子

塙萩野兩家系譜

○小野篁

孝泰 横山黨祖
武藏守

萩野五郎季時 萩野家祖

萩野佐左衛門

法名本相淨圓信士
元祿元年五月三日歿

宇右衛門

辨理常願比丘
明和二乙酉年三月廿九日歿

妻

花屋清壽信女
元祿十年二月廿七日歿

妻

智香庭薰大姉
安永二癸巳年二月十七日歿

宇兵衛

春光喜山居士
寛政七年二月八日歿

妻

清室妙蓮大姉
寶曆七年六月十三日歿

保已一

和學院心眼智光大居士
文政四辛巳年九月十二日歿

宇右衛門

臨雲道般大居士
明治二酉年十一月廿三日歿

妻はつ

頼願聲應信女
天保十一子年十月十六日歿

彌 七 寶譽淨光信士
明治十九年五月十七日歿

梅 吉 演譽暢音居士
安政五年八月二日歿

妻たに 來雲妙迎信女
安政三辰年三月廿二日歿

妻せき 安譽妙全大姉
明治三十五年三月十七日歿

茂十郎 堅譽淨茂居士
昭和七年三月十八日歿

當主武平

妻さは 澤譽妙壽大姉
昭和六年十二月廿五日歿



○塙先生百年祭記念碑 澁澤子爵題額

贈正四位塙保已一先生は東西に例なき偉人なり、この村よりかくの如き偉人を出しゝは、眞にこの村又この郡の名譽といふ可し、大正十年はこの偉人の歿後一百年に當れるを以て郡の有志相謀りて遺蹟保存會を組織し記念祭典を行ひ、尙あまねく全國の賛同を仰ぎて記念館を建設し、又この碑をも立つることとなせり、今より後學生は教師に引率せられて次々に見學に來るなるべく、巡覽者は遺物の展觀を樂みとして遠近より尋ね寄るなるべし、さても始めてこの地に遊ぶ人の感想や如何、偉人出生地としては餘りに平凡なりと失望せる人もあらむ、この片田舎の目無し子が、よくも學問に心を寄せしよと不思議に思ふ人もあらむ、目明人も讀得ぬ千萬卷の古書を讀みもし版にもして世を益せられしは、人間業とも覺えずとて、今更にその偉業に舌を卷くもあり、飛彈工はめて造れる眞木柱の一たひ立てし志は動かず、撓まず神明に盟ひし初一念を晩年に成遂げられし意志の強さを、これぞ成功の秘訣なるべきとて、舉めたいふるもあり、常人の堪ふべくもあらぬ困難辛苦に打克ちて、世に不可能といふ語なきことを示されたるぞ其の一生なりける、非凡といひ超人間といふは當らずとて、ひたすらその努力に感じ入るもあり、今の世にいふ學齡にも達せぬ齡にて早くも兩眼を失ひながら、かくも前代未聞の大業を成就せられしは、これすべて心眼の力にあらずや、心眼の光は齡とともにや加りけむと 専ら頭腦

の威力を歎美するもあり、或は其の逸話を談じ、或はその著述を數ふるなど、十人十色、音に聞きつる偉人の舊蹟を、今までのあたりに蹈見ては古き記憶も新しく呼覺さるべく、新しき印象は更に新しき感想をも生むるべし、こゝに一つの忘るべからざるものこそあれ、それは當時の盲少年を動かして、他日の大學者たらのめし原動力なり、この原動力は^{アシカレ}葦牙の如く少年の胸に萌初めしは何時の事とも知らざれども、その成長は極めて速かにして、忽ち心の全部を占め、はては炎とも燃上らむとせり、少年を江戸へ誘ひ去りて國學の門に導き入れしもこの力なり、身の不具者たるをも忘れて、叢書刊行の大願を思ひ立たしめしもこの力なり、古史を研究し、古典を整理し、我が古代文化の闡明に勉めたる一盲書生は終始一貫、この力に刺激せられ、激勵せられて、五十餘年一日も倦まず、遂に一世の大家となりて、不朽の功績を遺したるなり、かの一心不亂や、堅忍不拔や、勢力絶倫や、皆この力の發現活動に外ならざりしなり、この力そは何ぞ、尊皇愛國の精神即ちこれなり、この精神の一念凝つて文學の方面に具體化せられたるは即ち先生の事業なり、若しこの精神にして先生の心靈に觸るゝことなかりせば、先生は唯僻村の盲人にて終りしなるべく、世界人を驚かせる群書類從の編纂も、印行ももとより行はれさりしなるべく、百年後の今日の日本も現状の日本と異なりしなるべし、今は昔この郡この村に盲目の少年ありけり、その心眼の光は今も尙學界を照し世界を照せりと言はゞ人或は謎かと思はむ、されどこは謎にもあらず、空想にもあらずして疑ふべからざる史實なり、この史實が未來

永劫にわたり國民に與ふる教訓と、感化とは至大至高なるものならむ、來りてこの碑の下に立たむものは偉人の學德を追懷するとともに、この偉人をはぐくみ出てたる國家的精神の更に偉大なることも認むべきなり。

大正十一年九月十二日

東京帝國大學名譽教授從三位勳二等文學博士芳賀矢一

跋

三六

古來名家の子孫繁榮し、先代の遺業を繼ぎて世に名を擧げしもの極めて稀に、偉人の愛玩秘藏せし遺物の世に存するもの至て少きは一般の例なり、然るに近世國學者として世に聞えたる塙保已一先生の在世中常に用ひられし物又秘藏せられし品の、其生家たる兒玉郡保木野なる荻野家に多く傳來するは世に珍らしき事といふべし、されど、其遺品の子孫たる塙家に傳はらずして、生家荻野家に所藏するは如何なる故にかと、其由來を尋ぬるに、先生の嫡子次郎忠實氏は、文久三年不慮の災禍に罹りて沒し、孫敬太郎忠詔氏は、明治維新以後秩祿を失ひ、官途につきし事もあれど家資裕かならず、屢々舊縁たる荻野家に來りて援助を得たり、其關係より先生の遺物をば荻野氏に移して、保護を請うに至れるものなりといふ、是等の諸品よし本家に傳はらずとも、其生家に讓られて永く保存せらるゝを得しは、結果に於ては異なる所なしと云ふ可し、今其遺品を見るに、先生の檢校に進まれし時の告文及び封事を始め、多くの文書并に遺物なり、殊に先生が大志を起してより、四十二年の間毎朝般若心經を百遍づゝ讀誦せられし時、數取に用ひられし紐と、度數を一々記文せし手帳、又平河天滿宮に千日社參の時に使用せられし木綿の合羽を見て、當時先生が如何に不撓不屈の堅き精神を以て刻苦勉強せられしかの跡が偲ばれ、又先生が常に愛讀せられし色紙或は門下生の歌會の時に詠みし歌、或は先生の

年忌に詠みて奉れる追悼の歌なども多く、是を見て當時の人々の如何に先生の高德を慕ひしかを想像せらるゝ、今度この許多の遺物并に歌集等の由來をかきて世に傳へむ事を萩野武平氏より請はれたればこゝに筆とりて其由緒を略記す。

昭和十二年十一月

埼玉縣史蹟名勝天然記念物調査委員 金 鑽 宮 守

昭和十二年十二月十七日印刷
昭和十二年十二月廿二日發行

【定價金貳拾錢】

編輯兼發行者 埼玉縣兒玉郡青柳村
金 鑽 宮 守

印刷者 東京市淀橋區戸塚町一ノ一三
上 田 榮 吉

印刷所 東京市淀橋區戸塚町一ノ一三
泰 文 堂 印 刷 所

